

# トマス・アクィナス『定期討論集 靈的被造物について』

## 第五項 試訳

石田 隆太

### はじめに

本稿は、トマス・アクィナスによる『定期討論集 靈的被造物について』(*Quaestio disputata de spiritualibus creaturis*)の全訳を目指す試みの一環であり、以下の続編である。

石田隆太「トマス・アクィナス『定期討論集 靈的被造物について』第一項 試訳」,  
『宗教学・比較思想学論集』, 第15号, pp.33-57, 2014年. [石田2014aと略記]  
同「トマス・アクィナス『定期討論集 靈的被造物について』第二項 試訳」,『筑  
波哲学』, 第22号, pp.129-53, 2014年. [石田2014bと略記]  
同「トマス・アクィナス『定期討論集 靈的被造物について』第三項 試訳」,『宗  
教学・比較思想学論集』, 第16号, pp.57-91, 2015年. [石田2015と略記]  
同「トマス・アクィナス『定期討論集 靈的被造物について』第四項 試訳」,『古  
典古代学』, 第8号, pp.31-56, 2016年. [石田2016と略記]

この試訳の主要な意図に関してはこれまでの稿を参照されたい。以下では、これまでの稿と度々重複するところではあるが、便宜のために凡例を載せることとする。

### 凡例

- ・訳出にあたっては次のレオ版を底本とした。  
COS, J. ed. *Sancti Thomae de Aquino Opera omnia iussu Leonis XIII P. M. edita*, t.24.2: *Quaestio disputata de spiritualibus creaturis*. Roma-Paris: Commissio Leonina-Éditions du Cerf, 2000.
- ・他の版としては次の批判的校訂版も参照した。  
KEELER, L. W. ed. *Sancti Thomae Aquinatis Tractatus de spiritualibus creaturis*. Roma: Apud Aedes Universitatis Gregorianae, 1946.
- ・ただし、レオ版のテキストにはいくつか読解に難のある箇所があるため、場合によって次のものが提案する読みに従った。  
GULDENTOPS, G. & STEEL, C. “Critical Study: the Leonine edition of *De spiritualibus creaturis*.” *Recherches de théologie et philosophie médiévales*, 68(1), pp.180-203, 2001. [G&Sと略記]

- ・今回参照した『定期討論集 霊的被造物について』の近代語訳は次の通りである。  
BRENET, J.-B. *Les créatures spirituelles*. Paris: J. Vrin, 2010. [仏訳]  
FITZPATRICK, M. C. *On Spiritual Creatures*. Milwaukee: Marquette University Press, 1949. [英訳]
- GOODWIN, C. R. “A Translation of the *Quaestio disputata de spiritualibus creaturis* of St Thomas Aquinas, with Accompanying Notes.” M. A. thesis, Australian Catholic University, 2002. [英訳]
- SAVAGNONE, G. “Le creature spirituali.” In S. Tommaso d'Aquino, *Le questioni disputate*, vol.4, pp.524-809. Bologna: Edizioni Studio Domenicano, 2001. [伊訳]
- ・訳者自身による訳文中の [ ] は訳者による補いであり, [ ] は原語の引用である.
- ・訳語の選定にあたってはトマス・アキナスによる著作の既存の日本語訳等を参照したが, 参照したものの一例として次のものを挙げておく.  
長倉久子, 蒔苗暢夫, 大森正樹 編『トマス・アキナス「神学大全」語彙集 (羅和)』, 新世社, 1988 年.
- ・註にて使用した略号の一覧は次の通りである. なお慣例に従い, アリストテレスの著作にはベッカー版の頁数と行数を付した.

Andrea&北川 2004

Andrea, Bonazzi & 北川朋子「トマス・アキナス著 SUMMA CONTRA GENTILES の現代的解釈 (3)」, 『サピエンチア』, 第 38 号, pp.89-114, 2004 年.

Andrea&北川 2007

Andrea, Bonazzi & 北川朋子「トマス・アキナス著 SUMMA CONTRA GENTILES の現代的解釈 (6)」, 『サピエンチア』, 第 41 号, pp.65-93, 2007 年.

Andrea&北川 2008

Andrea, Bonazzi & 北川朋子「トマス・アキナス著 SUMMA CONTRA GENTILES の現代的解釈 (7)」, 『サピエンチア』, 第 42 号, pp.1-32, 2008 年.

Boese

BOESE, H. ed. *Proclus. Elementatio theologica translata a Guillelmo de Morbecca*. Leuven: Leuven University Press, 1987.

DN

*S. Thomae Aquinatis doctoris angelici In librum beati Dionysii de divinis nominibus expositio*. Ed. PERA, C. Torino-Roma: Marietti, 1950.

DP

“Quaestiones disputatae de potentia.” In *S. Thomae Aquinatis doctoris angelici Quaestiones disputatae*. Vol.2, pp.7-276. Ed. BAZZI, P., CALCATERRA, M., CENTI, T. S., ODETTO, E. & PESSION, P. M. Torino-Roma: Marietti, 1965<sup>10</sup>(1949<sup>1</sup>).

EM

*S. Thomae Aquinatis doctoris angelici In duodecim libros Metaphysicorum Aristotelis expositio*. Ed. CATHALA, M.-R., SPIAZZI, R. M. Torino-Roma: Marietti, 1977<sup>3</sup>(1964<sup>1</sup>).

G&S (前掲)

L.

*Sancti Thomae de Aquino Opera omnia iussu Leonis XIII P. M. edita.* Roma, 1882-.

Mansi

MANSI, G. D. ed. *Sacrorum conciliorum nova et amplissima collectio.* Firenze-Venezia, 1758-98.

PG

MIGNE, J.-P. ed. *Patrologiae cursus completus omnium SS. Patrum, doctorum scriptorumque ecclesiasticorum sive Latinorum, sive Graecorum.* Series Graeca. Paris, 1857-68.

PL

MIGNE, J.-P. ed. *Patrologiae cursus completus omnium SS. Patrum, doctorum scriptorumque ecclesiasticorum sive Latinorum, sive Graecorum.* Series Latina. Paris, 2 ed.

SS

*S. Thomae Aquinatis doctoris communis Ecclesiae Scriptum super libros Sententiarum magistri Petri Lombardi.* Ed. MANDONNET, P. & MOOS, M. F. Paris: P. Lethielleux, 1929-47.

アウグスティヌス著作集

『アウグスティヌス著作集』第1巻-, 教文館, 1979年-.

アリストテレス全集旧

出隆 監修『アリストテレス全集』第1-17巻, 岩波書店, 1968-73年.

アリストテレス全集新

内山勝利ほか編『アリストテレス全集』第1巻-, 岩波書店, 2013年-.

石田 2014a (前掲)

石田 2014b (前掲)

石田 2015 (前掲)

小高

オリゲネス『諸原理について』小高毅 訳, 創文社, 1978年.

川添

『トマス・アクィナスの心身問題—『対異教徒大全』第2巻より—』川添信介 訳註, 知泉書館, 2009年.

キリスト教神秘主義著作集

『キリスト教神秘主義著作集』第1巻-, 教文館, 1989年-.

神学大全

トマス・アクィナス『神学大全』第1-45冊, 高田三郎ほか訳, 創文社, 1960-2012年.

田之頭

田之頭安彦 訳「プロクロス 神学綱要」(田中美知太郎 編『世界の名著 15 プロティノス ポルピュリオス プロクロス』中央公論社 所収) pp.443-586, 1980年.

中世思想原典集成

上智大学中世思想研究所 監修『中世思想原典集成』第1-20巻, 平凡社, 1992-2002年.

永嶋

永嶋哲也 訳註「ボエティウス『イサボーゲー第二註解』」(清水哲郎 代表『古代末期からルネサンスにいたる自由学芸の展開と中世哲学への影響』科学研究費補助金研究成果報告書 所収) pp.91-99, 1996 年.

浜

H・デンツィンガー 編/A・シェーンメッツァー増補改訂『カトリック教会文書資料集』A・ジンマーマン監修/浜寛五郎 訳, エンデルレ書店, 1974 年.

増田

増田三彦「トマス・アクィナス著「信仰箇条と教会の諸秘蹟について——パレルモの大司教宛」, 『島大言語文化』, 第 11 号, pp.135-51, 2001 年.

・本稿では註にて他の文献からの引用を大量に行っているが, その中で特に引用元を明記していない日本語訳はすべて拙訳であることを断っておく.

## 試訳

### 靈的被造物について

#### 第五項<sup>1</sup>

第五に問題となるのは, 或る被造の靈的実体は物体<sup>2</sup>と合一しないものであるか否かである.

#### 【異論】

そしてそうではないと思われる<sup>3</sup>. その理由は次の通りである.

一. オリゲネスが『諸原理について』第 1 巻 [第 6 章] で述べているように, 「物的な連繋のいかなる付加もなしに存在するということが了解されるのは, ただ神にのみ, すなわち御父, 御子, 聖靈にのみ固有なことである」<sup>4</sup>. ゆえに, いかなる被造の靈的実体も物体と合一しないものではありえない<sup>5</sup>.

<sup>1</sup> 平行箇所: 『ロンバルドゥス「命題集」註解』第 2 巻第 8 区分第 1 問題第 1 項; 『対異教徒大全』第 2 巻第 46 章; 第 91-92 章; 『定期討論集 神の能力について』第 6 問題第 6 項; 『神学綱要』第 1 部第 75 章; 『神学大全』第 1 部第 50 問題第 1 項; 第 51 問題第 1 項; 『定期討論集 悪について』第 16 問題第 1 項; 『分離された実体について』第 1-4 章; 第 18 章; 『「原因論」註解』第 7 講.

<sup>2</sup> ここで「物体」と訳したラテン語は「corpus」である. 以下では文脈に応じて「corpus」を「物体」と「身体」という訳語を使い分けることとする.

<sup>3</sup> Cf. 『第 4 ラテラン公会議教令』第 1 章 (Mansi, t.22, p.982) 「われわれは次のことを固く信じ, はっきりと宣言する. [中略 (引用者)] 父と子と聖靈は同じ本質, 同じように永遠, 平等, 全能であり, すべてのものの唯一の原理である. 見えるものと見えないもの, すべての靈的および物質的なものの創造者である. その全能の力によって, 時の始めにあり, すべての靈的ならびに物質的なものを無から作った. すなわち, 天使と世界とを作り, その上, 靈魂と肉体とから成る人間を作った」(浜, pp.185-6).

<sup>4</sup> Cf. オリゲネス『諸原理について』第 1 巻第 6 章第 4 節 (PG 11, 170C) 「物質的実体なしに, またいかなる物的な添加なしに存在しうるのは, ただ神のみ, 即ち父と子と聖靈のみの独自の本性 [中略 (引用者)] である」(小高, p.104).

<sup>5</sup> 同様の異論は次の箇所にもある: 『定期討論集 神の能力について』第 6 問題第 6 項第 2 異論 (DP, p.172)

二. さらに、教皇パスカリス [2 世] が述べているように、霊的なものは物的なものなしには自存できない<sup>6</sup>。ゆえに、霊的実体が物体と合一しないものではありえない。

三. さらに、ベルナルドゥス『「雅歌」註解』には「すべての霊が物的扶助を要するのは明らかなことである」とある<sup>7</sup>。ところで、明白なことには、自然は必然的なものにおいて離反しない<sup>8</sup>のだから、ましてなおさら神は離反しない。ゆえに、被造の霊は物体なしには見出されない<sup>9</sup>。

四. さらに、もし或る被造の霊的実体がいかなる点でも物体と合一しないものであるならば、それが時間を超えているのは必然である。というのも、時間は物的なものを超出しないからである。しかるに、被造の霊的実体はいかなる点でも時間を超えてい

---

「さらには、オリゲネスが『諸原理について』で述べているように、いかなる霊的実体も、ただ神だけを除けば身体なしには存在しえない。ゆえに、天使と悪魔は、被造の実体であるのだから、自分と本性的に合一した身体を持つと思われる」；『神学大全』第1部第51問題第1項第1異論 (L.5, p.14)「オリゲネスは『ペリ・アルコーン』においていう。『質料的実体なしに、またいかなる物的附加の助けもなしに存在すると解されるということは、ひとり神の、即ち御父・御子・聖霊の本性にのみ固有なことからである。』と——。また、ベルナルドゥスも『雅歌教話』第六巻においていう。『我々は、ひとり神にのみ不死性と同じく非物体性を帰することにしよう。神なる本性こそ、自らのためにも他者のためにも、物的身体的な用具の援助を必要としない唯一のものなのだからである。これに対して、すべて被造的な霊は、物的身体的な援助を必要とするものなることは明白である。』と——。さらに、アウグスティヌスは『創世記逐語註解』のなかで、『悪霊たちは気体的動物の名で呼ばれている。彼らは気体の本性でもって生きているのだからである。』と語っている。だが、悪霊と天使とはその本性を同じくする。してみれば、天使もやはり、自然本性的に自らと一つであるような身体を持つのでなくてはならない」(神学大全 4, p.150)。

Cf. 『定期討論集 悪について』第16問題第1項主文 (L.23, p.282, ll.264-71)「それゆえ、第一原理——つまりは神——が物体でもなく物体と合一したものでもないということを仮定した上で、こうしたことはただ神にのみ固有なことであるのに対して、他の霊的実体は物体と合一したものだと或る人々は考えた。それゆえ、オリゲネスは「質料的実体なしに、また物的な付加のいかなる連繋もなしに存在するということが了解されるのは、ただ神にのみ固有なことである」と述べている」；『分離された実体について』第19章 (L.40, p.D74, ll.5-12)「天使たちは物的なものであるとか、質料と形相とから複合されたものであるとみなしていた人々がいた。オリゲネスも『諸原理について』第一巻でこのような見方をしていたように見える。つまり、そこで彼は次のように述べている。「質料的実体をもたずいかなる物的付加を交えることもなく存在するということは、神の——すなわち父と子と聖霊の——本性のみに固有なことである」(中世思想原典集成 14, p.686)。

<sup>6</sup> Cf. グラティアヌス『教令集』第2部第1事例第3問題第7法文。

<sup>7</sup> Cf. ベルナルドゥス『「雅歌」註解』第5説教第1章第6節 (PL 183, 800D)「だから、すべて造られた霊は、他人を助けるためにせよ、自分が助けられると同時に他人を助けるためにせよ、身体的な拠り所を必要としているのは明らかである」(キリスト教神秘主義著作集 2, p.92)。

<sup>8</sup> 「自然は必然的なものにおいて離反しない」という類の言説はアリストテレスに由来する。Cf. アリストテレス『魂について』第3巻第9章 432b21-22；トマス『ベルナルドゥス「命題集」註解』第4巻第43区分第1問題第4項第3小問題第2反対異論；『定期討論集 真理について』第8問題第3項第12異論；第10問題第6項第3反対異論；第12問題第2項第3異論；『対異教徒大全』第2巻第83章；第3巻第129章；『神学大全』第1部第76問題第5項主文；第78問題第4項主文；第118問題第3項主文；第2-1部第5問題第5項第1異論；第1異論解答；第51問題第1項第3異論；第91問題第2項第1異論；第2-2部第45問題第5項主文；第172問題第1項第4異論；『アリストテレス「命題論」註解』第1巻第6章；『アリストテレス「倫理学」註解』第1巻第9章；『定期討論集 徳一般について』第8項第20異論；第10項第2異論など。

<sup>9</sup> 同様の異論は次の箇所にもある：『神学大全』第1部第51問題第1項第1異論（註5を見よ）。

るわけではない。その理由は次の通り：被造の靈的実体は無から創造されたものであり、したがって転換〔versio〕から始まるのだから、それが転換されうるのは必然であるからして、他のものによって含まれるのでなければ被造の靈的実体は非存在へと離反しう。ところで、非存在へと離反しうるものはいかなる点でも時間を超えているわけではない。というのも、或る時は存在できて他の或る時には存在できないからである。〔以上がその理由である。〕ゆえに、或る被造の実体が物体なしに存在することはありえない。

五. さらに、天使は何らかの身体を引き受ける一方で、天使によって引き受けられた身体は天使によって動かされる。したがって、〔アリストテレスの〕『魂について』第2巻〔第2章〕で明らかのように、場所に即して動かされることは感覚することや生きることを前提するのだから<sup>10</sup>、天使によって引き受けられた身体は感覚し生きているのであるからして、それについてはやはり物体からは独立であるのがもっともなことだと思われる〔はずの〕天使が身体と本性的に合一したものであると思われる。ゆえに、いかなる被造の靈的実体も身体と合一しないものであるのではない。

六. さらに、天使は魂よりも本性的に完全である。ところで、生きて生命を与えるものの方がたんに生きているだけのものよりも完全である。したがって、魂は生きていながら身体の形相であることによって身体に生命を与えるのだから、ましてなおさら天使は、たんに生きているだけでなく、〔自分が〕生命を与える或る身体と合一してもいいと思われる。そのようなわけで、前〔の異論〕と同じである<sup>11</sup>。

七. さらに、明白なことに、天使は個々のものを認識する。さもなければ、天使が人間の監察を委ねられていることが無駄に終わってしまうであろう。ところで、天使は普遍的形相によって個々のものを認識することができない。なぜなら、その場合に個々

<sup>10</sup> Cf. アリストテレス『魂について』第2巻第2章413a22-25「ただしこの「生きている」ということはさまざまな意味で語られるが、もし次のうちのどれか一つだけがそのうちにそなわっているとすれば、それだけで、われわれはそれを「生きている」と語るのである。たとえば知性、感覚、場所的な運動と静止、さらに栄養による運動変化すなわち成長と衰微がそれである」(アリストテレス全集新7, p.70)；トマス『アリストテレス「魂について」註解』第2巻第3章(L.45.1, p.79, ll.144-52)「実際、生物の内の或るもの、すなわち植物においては、自育、成長、衰微といったことのみが見出される。他方、〔別の〕或るものにおいてはこれらに加えて、牡蠣のように不完全な動物におけるように場所的な運動がないものの感覚が見出される。他方、〔別の〕或るものにおいてはさらに、牛や馬のように前進運動によって動く完全な動物におけるように場所に即した運動が見出される。以上に対して、〔別の〕或るもの、すなわち人間においてはこれらに加えてさらに、知性が見出される」。

<sup>11</sup> 同様の異論は次の箇所にもある：『ロンバルドゥス「命題集」註解』第2巻第8区分第1問題第1項第4異論(SS, 2, p.204)「さらには、自分の中に生命を持ちながら〔それを〕他のものに授けもするものの方が、自分自身では生きていても他のものを生かさないものよりも高貴である。しかるに、天使の生命は魂のそれよりも高貴である。ゆえに、魂よりもましてなおさら天使は、合一した身体——それを天使が生かす——を持つと思われる」；『定期討論集 神の能力について』第6問題第6項第8異論(DP, p.172)「さらには、生きて生かしもするものの方が、たんに生きているだけのものよりも高貴な仕方では生命を持つ。例えば、光りながら照らしもするものにおける光の方が、たんに光っているだけのものにおけるそれよりも完全である。しかるに、人間の魂は生きていてかつ自分と本性的に合一した身体を生かしもする。ゆえに、天使も魂に劣らず高貴な仕方では生きている」；『神学大全』第1部第51問題第1項第3異論(L.5, p.14)「天使における生命は、魂におけるそれよりもより完全なものなのである。然るに、魂といえども単に生きているにとどまらず、さらに身体に生命を与えるのである。してみれば、天使はやはり自然本性的に自らと一つである身体に、生命を与えるのでなくてはならぬ」(神学大全 4, p.151)。

のものの認識は、未来を認識することはやはりただ神にのみ属すものの、過去と未来に対しては等しい仕方に関わることになってしまうからである。したがって、天使は個別的形相を通じて個々のものを認識し、その個別的な形相は「自分が」受容される身体器官を必要とする。ゆえに、天使は自分と合一した身体器官を持つのであるからして、いかなる被造の霊も全く身体から独立ではないと思われる。

八. さらに、個体化の原理は質料である<sup>12</sup>。ところで、天使は何らかの個体であり、さもなければ天使は固有の活動を持たないことになるであろう。というのも、活動することは個別のものに属す<sup>13</sup>からである。したがって、上述のように<sup>14</sup>天使は「自分が」それに由来するものとしての質料を持たないのだから、「自分が」それにおいてあるものとしての質料、すなわち「自分が」それと合一する身体を天使は持つと思われる。

九. さらに、被造の霊は、有限実体であるのだから、限定された類や種においてあるのが必然である。したがって、被造の霊には種の普遍的本性を見出しうる。ところで、被造の霊は普遍的本性そのものに基づけば「自分が」個体化される所以のものを持たない。ゆえに、それによって被造の霊が個体化されるような或る付加されたものがなければならぬ。ところで、これ「それによって被造の霊が個体化されるような或る付加されたもの」は天使の複合に入り込むような或る質料的なものではありえない。というの

<sup>12</sup> 「個体化の原理は質料である」という類の言説は次の箇所にもある：『対異教徒大全』第1巻第44章；第4巻第63章；『神学大全』第1部第29問題第3項第4異論解答；第54問題第3項第2異論解答；第56問題第1項第2異論解答；第75問題第4項主文；第75問題第5項主文；第76問題第2項第3異論解答；第86問題第3項主文；第3部第6問題第1項第2異論解答；第77問題第2項主文；『アリストテレス「形而上学」註解』第5巻第8講；第7巻第7講；第10巻第4講；第11講など。

<sup>13</sup> 「活動することは個別のものに属す」という類の言説はアリストテレスに由来する。Cf. アリストテレス『形而上学』第1巻第1章981a16-17；『ニコマコス倫理学』第2巻第7章1107a31；第3巻第1章1110b6-7；1111a23-24；第6巻第7章1141b16；『政治学』第2巻第8章1269a11-12；トマス『ロンバルドゥス「命題集」註解』第3巻第5区分第2問題第3項第2異論；第18区分第1問題第1項第2異論；第2異論解答；第4巻第4区分第2問題第1項第3小問題第2異論解答；第18区分第2問題第3項第2小問題主文；第29区分第1問題第1項主文；『定期討論集 真理について』第16問題第2項第2異論；第20問題第1項第2異論；第22問題第4項第3異論解答；第9項第6異論解答；『対異教徒大全』第1巻第65章；第2巻第48章；第3巻第6章；第75章；『神学大全』第1部第22問題第3項第1異論解答；第39問題第5項第1異論解答；第40問題第1項第3異論解答；第56問題第1項第2異論；第57問題第2項主文；第86問題第1項第3異論；第2-1部第1問題第7項第3異論；第3異論解答；第6問題序文；第9問題第2項第2異論解答；第14問題第1項主文；第3項主文；第6項第1異論；第29問題第6項主文；第39問題第1項主文；第58問題第5項主文；第76問題第1項主文；第77問題第2項第1異論解答；第90問題第2項第2異論；第95問題第1項第3異論；第96問題第1項第2異論；第2-2部序文；第8問題第3項第1異論；第47問題第3項主文；第9項第2異論解答；第53問題第4項第3異論解答；第58問題第2項主文；第60問題第3項第1異論；第106問題第2項主文；第142問題第3項主文；第3部第7問題第13項主文；第11問題第1項第3異論解答；第19問題第1項第3異論；第20問題第1項第2異論解答；『定期討論集 霊的被造物について』第9項第6異論解答；『知性の一性について』第5章；『第五任意討論集』第5問題第3項主文；『定期討論集 悪について』第2問題第6項第13異論解答；第6問題第1主文；第12問題第4項第3異論解答；『アリストテレス「倫理学」註解』第3巻第6章；『定期討論集 受肉した御言葉の合一について』第5項第5異論；第8異論；第13異論など。

<sup>14</sup> Cf. 本書第2項主文 (L.24.2, p.30, ll.318-22) 「ところで、もし霊の実体が質料と形相から複合されているとすれば、霊の実体が身体の形相であるのはありえないことになってしまう。なぜなら、他のものの内にあるということではなくて、自身が第一の基体であるということが質料の理拠に属すからである」(石田 2014b, p.146 (ただし訳を改めた。以下も同様))。

も、天使は非質料の実体だからであり、それは上述の通りである<sup>15</sup>。ゆえに、それによって天使が個体化されるような或る物体的質料が天使に対しては付加されるのが必然である。そのようなわけで、前〔の異論〕と同じである。

十. さらに、被造の霊的実体は質料だけのものではない。なぜなら、その場合に被造の霊的実体は可能態においてのみあることになり、或る活動を持たないことになってしまうからである。さらに、上で示されたように<sup>16</sup>被造の霊的実体は質料と形相から複合されたものでもない。したがって、残るは、被造の霊的実体は形相だけのものであるということしかない。ところで、形相の理拠には〔自分が〕合一する質料の現実態であるということが属す。ゆえに、被造の霊的実体は物体的質料と合一すると思われる。

十一. さらに、類似のものについての判断は同じである。しかるに、或る被造の霊的実体〔人間の魂〕は身体と合一する。ゆえに、〔被造の霊的実体〕すべてがそうである。

### 【反対異論】

しかし、以上に反対する。

一. ディオニュシオスが『神名論』第4章で述べているように、天使は非物体的かつ非質料的である<sup>17</sup>。

二. さらに、哲学者〔アリストテレス〕の『自然学』第8巻〔第5章〕によれば、もし或る二つのものが、その一方が他方なしに見出されうるように結合されたものとして見出されるならば、その他方のものもまた他のものなしに見出されなければならない。というのも、動かされかつ動かすような或るものが見出されるからである。それゆえ、もし或るものが動かさずに動かされるものであるならば、動かされず動かすような或るものもまた見出される<sup>18</sup>。しかるに、物体的実体と霊的実体から複合された或るものが

<sup>15</sup> Cf. 本書第1項第4異論解答 (L.24.2, p.15, ll.458-60) 「それゆえ、明白に窺えることには、種をすべて欠く質料は天使の実体の部分ではない」(石田 2014a, p.50 (ただし訳を改めた。以下も同様)); 第19異論解答 (p.19, ll.622-4) 「ところで、天使は同じ種において数という点で多数であるのではなくて、多数の天使は、諸々の種の自体的に自存する多数の本性としてある」(p.55); 第2項第11異論解答 (p.32, ll.425-7) 「第十一に対しては次のように言われるべきである。天使と魂は、両者が知性実体である限りでは、類の本性という点で同等である」(石田 2014b, p.150)。

<sup>16</sup> Cf. 本書第1項主文 (L.24.2, p.14, ll.401-2) 「そしてこのような仕方では、質料と形相から複合されていない霊的実体の本性」(石田 2014a, p.48)。

<sup>17</sup> Cf. 偽ディオニュシオス『神名論』第4章第1節 (PG 3, 693C) 「この光によって彼らは物体と質料から解放されたものとして認識され、自らは知的な存在者として、世界を越えた仕方で認識する」(キリスト教神秘主義著作集 1, p.169); トマス『ディオニュシオス「神名論」註解』第4章第1講 (DN, p.88, n.278) 「それゆえ、天使は、非物体的かつ非質料的である限りで、現実態において可知的である」。

なお、同様の反対異論は次の箇所にもある: 『ロンバルドゥス「命題集」註解』第2巻第8区分第1問題第1項第1反対異論; 『神学大全』第1部第51問題第1項反対異論。

<sup>18</sup> Cf. アリストテレス『自然学』第8巻第5章 256b13-24 「そのうえ、このこと〔最初の(第一の)動かすものが動かされえないものであること〕が結論されるのも、もっともである。というのは、運動には、三つのもの、すなわち、動く〔動かされる〕ものと、動かすものと、それで動かすところのそれ〔手段的なもの〕とが含まれていなければならない。ところで、これら三つのもののうち、動く〔動かされる〕ものは、動かされなければならないが、かならずしも何かを動かす必要はない。また、それで動かすところのそれ〔手段的なもの〕は動かすとともに動かされなければならない。(というのは、それ〔手段的なもの〕は、それで動かされる当のものと一緒であり同じ関係にあることによって、その当のものと転



見出される。したがって、或る物体が霊なしに見出されるのだから、或る霊が物体と合一しないものとして見出されうと思われる。

三. さらに、サン＝ヴィクトルのリカルドゥスが次のように議論している：神においては、一つの本性に複数のペルソナが見出される。ところで、人間においては、二つの本性に、すなわち魂と身体に一つのペルソナが見出される<sup>19</sup>。[以上がその議論である。] ゆえに、中間のもの、すなわち一つの本性に一つのペルソナであるもの——もし霊的本性が身体と合一するとすれば、それは存在しないことになるだろう——も見出される。

四. さらに、天使は[自分が]引き受けた身体においてある。ゆえに、もし他の身体が自分と本性的に合一するとすれば、二つの身体が同時に同じものにおいてあることが帰結するであろうが、それはありえないことである。ゆえに、被造の或る霊的実体は自分と本性的に合一する身体を持たないものである。

### 【主文】

解答. 次のように言われるべきである。われわれの認識は感覚から始まる一方で、感覚は物的なものに関わるのだから、真理について最初に探究した人々は物的本性のみを捉えることができるだけであった。そのために、最初の自然哲学者たちは物体以外には何も存在しないと考えていた<sup>20</sup>。それゆえ、魂自身も物体であると彼らは主張して

---

化をとともにするからである。このことは場所的に動かすものどもの場合をみれば明らかである。というのは、それら[たとえば、石を投げる手と投げられる石]は、或るところまでは[石が放たれるまでは]、相互に接触していなければならないからである。)だが、動かすものは——それで動かすところのそれ[手段的なもの]ではないという意味での動かすもの——は、動かされえないものでなければならない。ところで、われわれは、系列の最後のものとして、動かされることは可能だが[それ自身によって動かされるという]運動の原理をもたないところのもの[無生物]と、動かされるが他のものによってではないにそれ自身によって動かされるところのもの[生物]とを見るからして、[そのことから類推して]それ自身は動かされえないものでありながら他のものを動かすところの第三のものが[系列の最後のものとして]あるということは——必然的であるとは言わないまでも——もっともである(アリストテレス全集旧3, pp.328-9)；トマス『アリストテレス「自然学」註解』第8巻第5章(第9講)第8節(L2, p.398)「実際、もし或る二つのものが附帯的に結合され、一方が他方なしに見出されるならば、他方のものもまたその一方のものなしに見出されるのが蓋然的である(しかるに、その一方のものなしに見出されうることが必要である。なぜなら、附帯的に結合されるものは結合されないことがあるからである)。[中略(引用者)]したがって、最後に動かされるもののように、もし動かすものが動かされることが附帯的であり、また或るものにおいて動かすことなしにその動かすものが動かされることが見出されるならば、動かされることなしに動かすことが見出されるであろうようなものが動かされず動かすような或るものであるのは蓋然的である」。

<sup>19</sup> Cf. サン＝ヴィクトルのリカルドゥス『三位一体論』第3巻第9章(PL 196, 921B)。

<sup>20</sup> Cf. アリストテレス『自然学』第4巻第6章213a29「すなわちかれらは、およそ存在するものはすべて物体であると思っている(アリストテレス全集旧3, p.143)；トマス『神学大全』第1部第50問題第1項主文(L5, p.4)「往昔のひとびとはこの知性認識の力というものについて無知であり、感覚と知性とを区別することもなく、かくて彼らは、この世界には感覚や表象によって捉えられうるもの以外には何も存在しないと考えた。そして、表象に入ってくるものとしては物体しか存在しないところから、アリストテレスの『自然学』第四巻に従っていえば、「物体のほかにはいかなる有も存在しない」と考えたのである(神学大全4, p.128)；『アリストテレス「自然学」註解』第4巻第6章(第9講)第4節(L2, p.174)。

いた<sup>21</sup>。異端であるマニ教徒も彼らに追従しているように思われる。マニ教徒は神のことを、無限の空間に広がる何らかの物理的光であると考えていた<sup>22</sup>。かくして、神のことを人間の身体の輪郭によって形作られたものとして拵えていた神人同形論者もまた、物体以外には何も存在しないと見なしていた<sup>23</sup>。しかし〔アナクサゴラス、プラトン、アリストテレスなどの〕後代の哲学者たちは、知性によって物理的なものを理性的に超越することで、非物理的実体の認識に到達した<sup>24</sup>。彼らの内で最初の者であるアナクサ

<sup>21</sup> Cf. アリストテレス『魂について』第1巻第2章 403b24-404b14「デモクリトスが魂は一種の火や熱であると主張するのも、このような考え方からである。〔中略 (引用者)〕レウキッポスも同様な見解である〔中略 (引用者)〕ピュタゴラス派の人々によって語られることも、これと同じ考え方を含んでいると思われる。事実、彼らのうちの一部の人は空気中の微塵が魂であると主張し〔中略 (引用者)〕エンペドクレスが、魂はすべての基本要素から構成されるとともにこれら基本要素のそれぞれもまた魂であるとして、次のように語っているのがその一例である。／なぜならわれわれは見る、土によって土を、水によって水を、／空気によって神的な空気を、火によって焼き滅ぼす火を」(アリストテレス全集新 7, pp.22-26)；トマス『アリストテレス「魂について」註解』第1巻第3～4章 (L.45.1, pp.13-21)。

<sup>22</sup> Cf. アウグスティヌス『諸々の異端について』第46章第7節 (PL 42, 35)；トマス『対異教徒大全』第1巻第20章 (L.13, p.55b, ll.30-32)「また、神が無限の空間を通じて広げられた光の或る無限な実体であると考えたマニ教徒も同様に排除される」(Andrea&北川 2004, p.106)；『定期討論集 悪について』第16問題第1項主文 (L.23, p.282, ll.239-42)「神さえも何らかの物理的光であると措定したマニ教徒の誤謬があつて、それは、マニ教徒が知性によって想像力を超越することができなかったことに由来する」。

<sup>23</sup> Cf. アウグスティヌス『諸々の異端について』第50章 (PL 42, 39)；『書簡 148』第4章第13-14節 (PL 33, 628)；偽ヒエロニムス『詩篇』概要』詩篇 93 第8-9行目 (PL 26, 1174C)；トマス『対異教徒大全』第1巻第20章 (L.13, p.55b, ll.26-30)「さらに同じ議論によって、単純なユダヤ人、テルトゥリアヌス、ヴァディアン派の人々、つまり神を身体的に描こうとした擬人観の異端者たちのデタラメの誤謬も排除される」(Andrea&北川 2004, pp.105-6)；『信仰箇条と教会の諸秘跡について——パレルモの大司教宛』第1部 (L.42, p.245, ll.44-48)「第三は神人同形論者の誤謬である。彼らは、一なる神を主張するのではあるが、神が物理的なものであり、人間の身体のように形造られていると言うのである」(増田, p.136)。

<sup>24</sup> Cf. トマス『定期討論集 神の能力について』第6問題第6項主文 (DP, p.173)「すなわち、古代の〔自然〕哲学者たちの何人かは、いかなる実体も非物理的ではなくて、実体はすべて物体であると主張した。アウグスティヌスもまた自分がそのような誤謬に陥ったことを告白している。ところで、このような立場は哲学者たちによっても否認されている」；『定期討論集 悪について』第16問題第1項主文 (L.23, p.282, ll.236-8)「実際、最初の自然〔哲〕学者たちについてそうであるように、最初に事物について探求を始めた人々は物体以外には何も存在しないと考えた」；『分離された実体について』第1章 (L.40, p.D41, ll.1-33)「諸事物の本性について哲学した人々のうち最初の人々は、存在するのはただ物体のみであると考え、諸事物の第一の根源は、一つの、あるいは複数のなんらかの物理的な元素であると考えた。そして、そのような元素を一つとする場合には、これをミレトスのタレスのように「水」であるとか、ディオゲネスのように「空気」であるとか、ヒッパソス〔ヒッパソス〕のように「火」であるとか、ヘラクリトウスのように「蒸気」であると考えた。他方、そのような元素を複数とする場合には、エンペドクレスが四つの元素と、これらに加えて「友愛」と「争い」という二つの動者を考えたように、〔その数を〕有限とするか、あるいはデモクリトウスとアナクサゴラスのように〔その数を〕無限とするかであった。デモクリトウスとアナクサゴラスは、どちらも無限〔の数〕の微細な部分がすべての事物の根源であると考えていたが、ただしデモクリトウスはこれらが類においては同様のものであつて、ただ形態と配列と位置によってのみ相違すると考えていたのに対し、アナクサゴラスは、さまざまに異なる諸事物がもろもろの同質の部分と共有しており、諸事物がもつこのような無限の〔種類と数の〕微細な部分が諸事物の第一の根源であると考えたのである。また、彼らすべてには、事物の第一の根源であるものを神と考えるということがその精神のうちに生得的に与えられていたので、彼らのおのおのは諸物体の中の何かに第一の根源の資格を帰すると、これに従つてこの同じものに「神性」の名称と尊厳とを帰属せしめるべきだとみなしたのである。／彼らがこのように語つたのは、これらの人々すべてに、また彼らを継い

ゴラスは、物的なものすべては互いに混合したものだとはじめから措定していたので、物的なものの上に、物的なものを区別し動かすような或る混合していない非物的なものを措定するよう促されたのであった。そしてこれをアナクサゴラスはすべてを区別し動かす知性であると呼んでいたものであり<sup>25</sup>、それをわれわれは神と言っている。そ

だ人々に、なんらかの非物的な実体——われわれはそれを「天使」という名で呼ぶ——が存在するとは思われなかったからである。確かに、エピクロス主義者たちはデモクリトスの説を基にしてある種の神々を考えていたのだが、彼らはこの神々のことを物的な〔身体をもつ〕ものだと考えていた。というのは、彼らはこの神々を人間のような姿形をしたものだと考えていたからである。彼らによれば、この神々には何の用事もなく、何の気遣いもないので、明け暮れ快楽を楽しみつつ、至福にあることができるのだという。また、彼らに発するこのような見解は非常に強力となり、〔唯一の〕神を崇拝するユダヤ人の中にまで達して、彼らの中のサドカイ人たちは「天使も霊も存在しない」〔使二三：八〕と言うに至ったのである」（中世思想原典集成 14, pp.594-5）。

<sup>25</sup> Cf. アリストテレス『自然学』第8巻第1章 250b24-26「その一つは、アナクサゴラスが言うような仕方であって、かれは、すべてのものは一緒であったし、無限の時間にわたって静止していたが、理性がそれらのあいだに運動をひきおこしてそれらを分離した、と主張している」（アリストテレス全集旧 3, p.294）；第5章 256b24-27「それゆえ、アナクサゴラスの主張したところも、かれが理性を非受動的であり非混合的であるとした点で、正しい。なぜなら、かれは、それを運動の原理であるとしているのだから。というのは、理性は、動かされえないものであることによってこの意味で〔運動の原理として〕のみ動かさうるのであり、非混合的であることによってのみ支配しうるのであるから」（p.329）；『魂について』第1巻第2章 404b1-5「他方でアナクサゴラスの説明は、魂と知性というこの二つの概念について、デモクリトスに比べて明晰さを欠いていると言わねばならない。というのも、彼は多くの箇所では物事が美しくまた正しくあることの原因が知性であると語っているのだが、別の箇所では知性とは魂であると述べてもいるからである。そう言えるのは、アナクサゴラスの考えでは、その大小、貴賤を問わずすべての動物に知性が属しているからである」（アリストテレス全集新 7, pp.25-26）；同 405a13-19「これに対してアナクサゴラスは、以前にも述べたように、魂と知性とが異なるものであると語っているように見えるが、実際のところは両者を単一の本性のものとして取り扱っている。ただし少なくとも、知性がとりわけて万物の始原であると措定している点は別である。確かに彼は知性こそが存在するもののなかで唯一単純で混交せず純粋であると主張している。だが、知性が万有を動かしたと語るとき、彼は認識することと動かすことの両方をこの同じ始原に帰属させているのである」（p.28）；同 405b19-23「けれども唯一アナクサゴラスだけは、知性は他から作用を受けることはなく、他のいかなるものとも何一つ共通性をもたないと言っている。しかし知性がそのような性格のものでありながら、どのような仕方でも、またいかなる原因によって認識することになるのかという点について彼は述べていないし、彼の発言からも明確な答えは得られない」（p.32）；第3巻第4章 429a18-20「そうすると、知性がすべての事象を知性認識する以上は、アナクサゴラスの主張するように、それが支配するためには、すなわち認識するためには、混交していないものであることは必然である」（p.146）；『形而上学』第1巻第3章 984a11-16「しかし、クラゾメナイのアナクサゴラスは、年齢においてはエムペドクレスよりも前であるがその業績においては後の人で、この人は原理を無限に多くあると主張している。かれによると、その原理とした「同質部分的なもの」は、ほとんどすべて、あの水や火がそうであったように、すなわちただ結合しあるいは分離する仕方でのみ生成しあるいは絶滅するものであって、それ以外の仕方では生成しも絶滅しもせず永遠にそれ自らに止まり存する、というものであった」（アリストテレス全集旧 12, pp.15-16）；第8章 989a30-b21「アナクサゴラスについては、もし誰かがアナクサゴラスは二つの要素があると説いたと判定したなら、この判定こそは最もよくかれの説の帰するところをつかんだものと言えよう。ただし、かれ自らはその説をそこまで明らかに発展させてはいなかったが、しかし、もし誰かがかれをそこまで誘導したならば、かれは当然この帰結を承認したにちがいない。なるほどたしかに、「始めにすべてが全く混合していた」というかれの説は、いろいろの理由で不条理である、ことにつぎの理由でそうである、すなわち、もしそうだとすると、それらはその初めより以前には未混合で存在していたということになるし、なおまた、任意のいずれかが任意に他のいずれかと混合するということは自然的ではないからである。さらに加うるに、混合して存するその同じものがまた分離されても存しうがゆえに、その属性

や付帯性が当の実体から離れて存しうという〔不条理な〕ことになるから、等々の理由によって、しかし、それにもかかわらず、もし誰かがかれに従ってその言わんと欲したところを総合してみるならば、おそらくはそこにいっそう新しいことの説かれていたのを発見するであろう。けれど、分離されて存するなにもものもなかったとすれば、明らかにあの初めの実体については真に述語さるべきなにもものも存しえなかったであろうからである。という意味は、このような実体は、たとえば白いとも黒いとも言われず、あるいは灰色でもなくまたその他のどのような色でもなくて、かえって色のないものであったにちがいない、なぜなら、もし色があったとすれば、これらの色のいずれかを所有していたであろうから。同様にそれはまた、同じ理由で、味のないものであり、その他そのようないかなる属性をも所有していないものであった。要するにそれは、どのようなと言われる〔性質的に述語される〕なにもものでも、どれほどと言われる〔量的な〕なにもものでもありえず、またなにと問われる〔実体的な〕なにもものでもありえなかったはずである。というのは、もしそうでありうるとすれば、これらの特殊な形相のいずれかがそれに属しているはずであるが、しかしこのことは、すべてが全く混合していたというのだから、ありえないことである。なぜなら、もしそのいずれかがそれに属しているとすれば、そのいずれかはすでにそれまでは切り離されていたはずであるのに、かれの言によると、すべては全く混合していて、ただ一つ理性のみが非混合であり純粋であったというのだから。そこで、これらから推すと、アナクサゴラスは、原理を「一」と「異」とであると言うべきであった。「一」というのは、それが単純であり非混合であるからであり、「異」というのは、あたかもわれわれの想定している不定なもののごときもので、いまだなにと規定されずいまだなんらの特定な形相にも与からないそれ以前のものである。それゆえ、かれの現に言っているところは正当でもなく明確でもないが、しかしかれの言わんと欲したところには、その後の人々によって説かれそしていまではいっそう明白にされているところの説になんらか近似的なものがある」(アリストテレス全集旧 12, pp.35-36); トマス『アリストテレス「自然学」註解』第 8 巻第 1 章 (第 1 講) 第 5 節 (L.2, p.363); 第 5 章 (第 9 講) 第 9 節 (p.398); 『アリストテレス「魂について」註解』第 1 巻第 3 章 (L.45.1, pp.15-16, ll.163-179)「第三に「ところでアナクサゴラスも同様に魂を」云々と述べる際に、アリストテレスは魂の本性についてのアナクサゴラスの見解を措定している。そしてアリストテレスは、いかなる点においてアナクサゴラスが上述の人々と一致していたのかを第一に措定する。その際にアリストテレスが述べているところによれば、「アナクサゴラスおよび他の人で、知性は」すべてを「動かすと述べた人」であれば誰であれ、上述の人々も述べているように魂はすべてを動かすものであると述べている。次にアリストテレスは、アナクサゴラスが次の点において〔上述の人々とは〕異なることを措定する。すなわち、他のものを動かすものはすべて自身も動かされるのだということをアナクサゴラスは否定しようとしたのであり、むしろアナクサゴラスは、動かされることなく他のものを動かす一つの分離された混合していない知性があると述べ、魂はこうした知性の本性に属すると述べた。それゆえ、こうしたことから、魂が神の本性に属すると述べるような人々の誤謬が生じてしまった。〔以上のような点において異なる。〕そのようなわけで、いかなる点において、つまり魂が動かすものであると述べた点において、アナクサゴラスが上述の人々と一致していたということ、しかし、魂が動かされるのではないと述べた点——上述の人々はそれとは反対のことを述べていた——において、アナクサゴラスが〔上述の人々とは〕異なっていたということが明らかである」；第 5 章 (p.24, ll.93-114)「「ところでアナクサゴラスは」云々と続けて述べる際に、当該のもの、すなわち魂に認識と運動の理拠を帰属するという点において上述の人々と一致していたアナクサゴラスの見解を措定している。さてアナクサゴラスは、上述「のように、魂と知性は別のものだ」と述べている」ように思われる時もあれば、「両者を」すなわち魂と知性を「[同じ]一つの本性として取り扱っている」時もある。その理由は次の通り：魂は運動と認識を司るものだ」とアナクサゴラスは述べていた。それゆえ、知性はすべてを動かすものであり認識を司るものであるとアナクサゴラスは措定していたのだから、魂と知性を同じものとしてアナクサゴラスは解していた。〔以上がその理由である。〕しかし次の点においてアナクサゴラスは他の人々と異なっていた。すなわち、デモクリトスは魂を質料的原理から複合されたものとして物体的本性に属するのだと措定していたのに対して、アナクサゴラスは知性を、本質における相異性を除外するために単純であると述べ、他のものとの複合を除外するために混合していないと述べ、他のものからの変造を除外するために純粋であると述べている。しかるに、アナクサゴラスは運動と認識を「同一の原理」すなわち知性に「宛がっている」。というのは、知性は自分の本性に基づいて、〔自分が〕認識するものであるということを持つ一方、既述のようにアナクサゴラスは知性がすべてを動かすと述べているのだ



なわち類や種や他の自分について普遍的に述べられるものの本性を分有するのだから、このような類の本性「＝抽象的で分有されない或るもの」は可感的なものから抽象されて自体的に自存するものであるとプラトンは指し示し、それを分離された実体と名づけたのであった<sup>27</sup>。それに対してアリストテレスは、分離された非物体的実体を天の運動の

あると、——いわば、神そのものが最高善であるように——、教えたからである」(神学大全 10, pp.206-7)；『分離された実体について』第1章 (L.45, p.D43, ll.127-33)「だが、単純で分有されたものではない第一の一性である最高神の下には、その他の諸形象がいわば第二の一性、第二の神々として存在している。そこでプラトンは同様に、これらの形象ないし〔第二の〕一性の下にもろもろの離散的「知性」の階層を指し示して、これらは現実態において知性認識するために今述べた諸形象に分有するとしたのである」(中世思想原典集成 14, p.598)。

<sup>27</sup> Cf. アリストテレス『形而上学』第1巻第6章 987b1-14「ところでソクラテスは、倫理的方面の事柄についてはこれを事としたが、自然の全体についてはなんのかえりみるところもなく、そしてこの方面の事柄においてはそこに普遍的なものを問い求め、また定義することに初めて思いをめぐらした人であるが、このことをプラトンはソクラテスから受け継いで、だがしかし、つぎのような理由から、このことは或る別種の存在についてなさるべきことで感覚的な存在については不可能であると認めた。その理由というのは、感覚的事物は絶えず転化しているので、共通普遍の定義はどのような感覚的事物についても不可能であるというにあった。そこでプラトンは、あの別種の存在をイデアと呼び、そして、各々の感覚的事物はそれぞれその名前のイデアに従いそのイデアとの関係においてそう名づけられるのであると言った。けれど、或るイデアと同じ名前をもつ多くの感覚的事物は、そのイデアに与かることによって、そのように存在するというのであるから。ところで、ここに「与かること」と言ったこの言葉だけはかわった点である。というのは、ピュタゴラスの徒は存在する事物がそのように存在するゆえをば数に「まねること」によってであると言っているが、それをプラトンは、この言い方だけ変えて、「与かること」によってとしているのであるから。しかしとにかく、エイドス〔すなわちイデア〕に与かるとかまねるとかいうことはいったいなんのことか、——このことについては、かれらはこれを共同の研究課題としてわれわれに残した」(アリストテレス全集旧 12, pp.27-28)；第3巻第2章 997b3-5「ところで、われわれ〔プラトン学徒〕がエイドスを原因であり自体的に存在する実体であるとする意味は、さきにこれについて論じた個所で述べられたとおりである」(p.68)；第7巻第14章 1039a24-28「この同じ考察から、また、あのイデアを説く人々に対してもいかなる結論が出てくるかは明白である。かれらは諸々のイデアをそれぞれ実体であり離れて存するものであると説くとともに、同時にまた、それぞれのエイドスを類と種差とから成るものとしている。ところで、もし〔かれらの説くように〕諸々のエイドスが実在し、そして「動物」それ自身が人間のうちにも馬のうちにも存在するとすれば、これら両者のうちに存在するこの「動物」それ自体は、数においては一つであり同じであるか、あるいは異なるかである」(p.256)；トマス『アリストテレス「形而上学」註解』第1巻第10講 (EM, p.46, n.153)「それゆえ、「プラトン」もまたソクラテスの生徒として、「ソクラテスを受容し」、すなわち〔ソクラテスに〕追隨して次のようなことを自然の事物における探究のために受け入れた。すなわち、それについて定義が与えられるような、自然の事物における普遍が受け取られるというようなことが自然の事物においては生じうるような仕方〔を採用するということ〕であり、そのために定義は可感的なものの中の或るものについては与えられないことになる。その理由は次の通り：可感的なものは常に「変容するもの」の内にあるのだから、すなわち変容を蒙るのだから、可感的なものの中の或るものには共通な理拠が割り当てられることはありえない。というのは、すべての理拠はすべてのものに常に適合しなければならず、かくしてすべての理拠は或る不可変性を必要とするからである。〔以上がその理由である。〕それゆえ、可感的事物から分離されていて、それについて定義が割り当てられるような類の普遍的有を、プラトンは可感的存在者のイデアないし形象〔species〕と名づけた。「まづイデアと」すなわち形相〔forma〕としたのは、可感的存在者がイデアないし形相との類似に合わせて構成されていた限りでのことであるのに対して、形象としたのは、可感的存在者が形象の分有を通じて実体存在を持っていた限りでのことである。あるいはイデアとしたのは、それが存在の原理であった限りでのことであるのに対して、形象としたのは、それが認識の原理であった限りでのことである」；第3巻第7講 (p.115, n.406)「そしてアリストテレスが述べているように、いかんにして形象が可感的事物の原因として、また自体的に自存する何

永続性に基づいて措定することへと進んだ。その理由は次の通り：天の運動は或る終極を措定しなければならない。ところで、もし或る運動の終極が常に同じ仕方で存するわけではなくて、自体的にあるいは附帶的に動かされるとすれば、その運動は常に一樣な仕方で存するわけではないのは必然である。それゆえ、重いものや軽いものの自然的運動は、固有の場所にあることができるものに接近するほどより広がっていく。ところで、天体の運動においては常に一樣性が保たれるのをわれわれは見ている。そうしたことからアリストテレスは、この一樣な運動の永続性を想定した。したがってアリストテレスは、この運動の終極は自体的にも附帶的にも動かされないと措定しなければならなかった。ところで、物体あるいは物体の内にあるものすべては自体的にも附帶的にも可動的である<sup>28</sup>。そのようなわけでアリストテレスは、天の運動の終極であるような、全く物体から分離された或る実体を措定する必要があった。[以上がその理由である。]<sup>29</sup>

ところで、前述の「アナクサゴラス、プラトン、アリストテレスによる」三つの立場は次の点において異なると思われる。アナクサゴラスには、彼によって前提された諸原理に即しては、一つだけしか非物体的実体を措定する必然性がなかった<sup>30</sup>。他方でプラトンには、類、種、および他の抽象的なものとして彼が措定していたものの多数性と秩序に即しては、多数の互いに秩序づけられた非物体的実体を措定する必然性があった。実際プラトンは、本質的に善かつ一であるような第一の抽象的なものを措定し、それに伴って可知的なものおよび知性の相異なる秩序を措定したのであった<sup>31</sup>。他方でアリストテレスは、複数の分離された実体を措定した。というのも、天には多数の運動——その内のいずれも斉一かつ永続的であるとアリストテレスは措定していた——が窺える——その一方でいかなる運動にも或る固有の終極がなければならず、かくしてそのような運動の終極は非物体的実体であるべきである——のだから、天の運動の本性および秩序に即して互いに秩序づけられている多数の非物体的実体を措定することが帰結したからである<sup>32</sup>。[だが] またさらに非物体的実体を措定することに進むことはなかった。な

---

らかの実体として措定されるのかということとは「第一の論述で」、すなわち第一巻で述べられた。それゆえ、プラトンの見解を披露する際にそこ「第一巻」で述べられたことに基づけば、議論が肯定的な側面で受け取られうる」；第7巻第14講（p.383, n.1592）「「プラトンが」、たしかに普遍的なものを共通に実体であると措定してはいたものの、種のイデアを措定していた一方で、類のイデアは措定しなかった」。

<sup>28</sup> Cf. アリストテレス『自然学』第6巻234b10-20（石田2015, p.63, 註9も見よ）。

<sup>29</sup> Cf. アリストテレス『形而上学』第12巻第8章1073a14-b17；トマス『アリストテレス「形而上学」註解』第12巻第9講（中世思想原典集成14, pp.431-41）。

<sup>30</sup> 註25を見よ。

<sup>31</sup> Cf. ボエティウス『ポルピュリオス「イサゴーゲー」註解』第2註解第1巻第11章（PL 64, 85B [ed. 1860]）「それゆえ、類種が思惟される時、それらがそのうちに存在するところの個々のものどもからそれらの類似点が集約される。例えば、それ自身の間では似ていない個々の人々から、人たることの類似点が集約される。この類似点が、精神によって思惟され、真なる仕方で見られて、種となる。さらにその種の様々なものの類似点が考察されて（それは種そのものにおいて、あるいはその個においてしか存在し得ないのであるが）類となる」（永嶋, p.98）；トマス『アリストテレス「自然学」註解』第2巻第2章（第3講）第5節（L.2, p.62）。また石田2015, pp.76-77, 註51も見よ。

<sup>32</sup> Cf. アリストテレス『形而上学』第12巻第8章1073a28-b1「そしてまた、われわれの視界内には、第一の不動の実体がそれを動かすのだとわれわれの主張しているところのその移動すなわち全宇宙の端的な移動〔恒星の天の円運動〕よりほかに、他の種類の移動、すなわち諸遊星の永遠的な運行があるからして（これを永遠的などというのは、およそ円環的な運動においてある物体は永遠的であり不静止的であ

ぜなら、明白なことから離れないというのがアリストテレスの哲学に固有なことだったからである。しかし以上のような方途はほとんどわれわれには適用されない。なぜならわれわれは、アナクサゴラスと同じく可感的なもの同士の混合を指定することはないし、またプラトンと同じく普遍的なものの抽象を指定することもないし、またアリストテレスと同じく運動の永続性を指定することもないからである<sup>33</sup>。それゆえ、提起されたこと「[或る被造の霊的実体は物体と合一しないものであるか否か]」を明白にするためには他の方途によってわれわれは進まなければならない。

したがって第一に、宇宙の完全性に基づけば、物体から全く独立の或る諸々の実体があると思われる。その理由は次の通り：それが存在することが可能であるような或る本性が宇宙には欠けていないということが宇宙の完全性であると思われる。それゆえ『創世記』第1章では、個々のものが善であると言われている一方で、すべてが同時に極めて善であると言われている<sup>34</sup>。ところで、明白なことには、もしその一方が自分の理

---

るからである。なお、このことについては自然学上の諸論文のなかで説明されている)、だからしてまた、必然的に、これらの運行の各々はそれぞれ或るそれ自ら不動で永遠的な実体によって動かされていなくてはならない。(けれど「なぜ或る実体によってでなくてはならないか」というに)、それぞれの星の本性は、或る種の実体であるがゆえに永遠的であり、そして、それを動かすものは、同じく永遠的であるが、動かされるものよりも先であり、そして、或る実体よりも先であるものは必然的にまた或る実体であらねばならないからである。) 明らかに、それゆえ、[これらの星の移動すなわち運行の多くあるだけ] それだけ多くの実体があり、そしてこれらの実体の本性は永遠的であり、それ自体において不動であり、そして(前述の理由により) 大きなものではないものである」(アリストテレス全集旧 12, pp.422-3); トマス『対異教徒大全』第2巻第91章 (L.13, p.553a, l.10-b, l.9) 「さらには、アリストテレスは『形而上学』第11巻[正しくは第12巻]で次のように議論している。連続的で規則的であり、それ自身では不足のない運動は、自体的にも附带的にも動かされることのない動者によるものでなければならず、それは上で証明された通りである。また複数の運動は複数の動者によるものでなければならず、それは上で証明された通りである。また第一の運動を除いては、天にはそのような運動が多数あり、それは天文学者の考察を通じて証明されている通りである。したがって、自体的にも附带的にも動かされることのない複数の動者があるのでなければならず。さて、いかなる物体も動かされるのでなければ動かないのであり、それは上で証明された通りである。ところで、物体と合一する非物体的動者は、物体の運動に合わせて附带的に動かされるのであり、それは魂について明らか通りである。したがって、物体でもなく物体と合一してもいない動者が複数あるのでなければならず。ところで、天の運動は或る知性によるものであり、それは上で証明された通りである。したがって、物体と合一しない知性的実体が複数あるのである」; 『アリストテレス「形而上学」註解』第12巻第9講 (EM, p.597, nn.2556-7) 「次にアリストテレスが「ところで、……われわれは……を見る」と語るとき、第二に彼は、第一原理の後に多数の非質料的で永遠的な実体を指定することが必然的であることを明らかにしている。[中略(引用者)] それゆえ、確かに上述したことは必然的である。なぜなら、もろもろの星は永遠的であり、かつある実体だからである。それゆえ、星を動かすところのものは永遠的なものであり、かつ実体でなければならず。というのも、動かす者は動かされるものよりもくいつそう先なるものだからである。そしてある実体よりもくいつそう先なるものは実体であることが必然的である。こうして、先に指摘された理由によって、星の運行があるだけそれだけ多くの実体があること、そしてそれらの実体は、本性上永遠的であって、また自体的に不動なるものであり、また大きなものではないことが必然的であることは明らかである。というのも、それら永遠的な実体は、無限の時間にわたって動かしているのだから、その結果として、無限の力によって動かしているからである。それゆえ、星の運動の数だけ、それだけ多くのある非質料的な実体があり、それらの秩序もまた星の運行と同じ秩序に従っていることは明らかである」(中世思想原典集成 14, pp.435-6)。

<sup>33</sup> 註25, 31, 32を見よ。

<sup>34</sup> Cf. 『創世記』第1章第4節「神は光を見て、良しとされた」(新共同訳、以下も同様); 第10節「神



拠に即しては他方には依存しないような或る二つのものがあるならば、その一方が他方なしに見出されることは可能である。例えば、「動物」は自分の理拠に即しては「理性的」に依存しないがゆえに、理性的ではない動物が見出されることが可能である。ところで、実体の理拠には、自体的に自存するということ、いかなる仕方によっても物体の理拠に依存しないということが属す。というのも、物体の理拠は、何らかの附帯性、すなわち諸次元と或る仕方に関わっており、その諸次元からは自存することは原因されないからである。したがって、残るは、或る類に含まれない神の後には、実体の類において物体から独立の或る諸々の実体が見出されるということしかない。[以上がその理由である。] 第二に、諸々の媒介を通じてのみ或る一つの端からもう一方の端へと到達する<sup>35</sup>ようなものであることが見出されるような——例えば、天体の下に火が、火の下に空気が、空気の下に水が、水の下に土が、すなわちこうした物体の高貴さと精妙さの連鎖に即して「何かが」無媒介に見出されるように——、諸事物の秩序に基づけば、同じことが考察されうる。ところで、諸事物の頂上にはあらゆる仕方で単純かつ一であるもの、すなわち神がいる<sup>36</sup>。したがって、全くもって複合され可分的である物体的実体が神の下に無媒介に集められることは不可能なことであって、それを通じて神の最高の単純性から物体的多数性への派生が行われるような多数の媒介を指定しなければならない。その媒介の内の或るものは物体と合一しない非物体的実体「天使」であるのに対して、[別の] 或

は乾いた所を地と呼び、水の集まった所を海と呼ばれた。神はこれを見て、良しとされた」；第12節「地は草を芽生えさせ、それぞれの種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける木を芽生えさせた。神はこれを見て、良しとされた」；第18節「昼と夜を治めさせ、光と闇を分けさせられた。神はこれを見て、良しとされた」；第21節「神は水に群がるもの、すなわち大きな怪物、うごめく生き物をそれぞれに、また、翼ある鳥をそれぞれに創造された。神はこれを見て、良しとされた」；第25節「神はそれぞれの地の獣、それぞれの家畜、それぞれの土を這うものを造られた。神はこれを見て、良しとされた」；第31節「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった」；アウグスティヌス『告白』第13巻第28章第43節（PL 32, 864）「あなたが創造されたすべてのものを見て、善い、と言われたことは聖書に七回記されています。そして八回目に、あなたが創造されたすべてのものを見て、あなたは単に「善い」とだけではなく、すべてのものを同時に「はなはだ善い」と言われました。つまり、個々のものがそれぞれに善かっただけではなく、すべてのものが同時に全体として「はなはだ善かった」のです」（アウグスティヌス著作集 5II, p.401）。

<sup>35</sup> 「媒介」ないし「中間」をめぐる言説はアリストテレスに由来する。Cf. アリストテレス『自然学』第5巻第章 226b23-25「転化するものが、自然にしたがって連続的に転化する場合に、その目指す終端に到達するより前に本来的に到達するところのものが、中間のものである」（アリストテレス全集旧 3, pp.202-3）；『形而上学』第10巻第7章 1057a21-22「けだし、いまわれわれが中間のものともと言っているのは、およそなにかに転化してゆくものがそれより前にまずそれらにまで転化しなくてはならないところのそれらのものどものことである」（アリストテレス全集旧 12, p.346）；トマス『定期討論集 真理について』第28問題第9項主文；『対異教徒大全』第2巻第19章；『定期討論集 徳一般について』第13項第14異論解答；『神学大全』第1部第53問題第2項主文；第55問題第2項第2異論解答；第2-2部第33問題第8項主文；第3部第6問題第3項第1異論；第57問題第4項第2異論；『アリストテレス「形而上学」註解』第10巻第9講。

<sup>36</sup> Cf. アリストテレス『天について』第2巻第4章 287a32-34「すなわち土の周りに水があり、水の周りに空気があり、空気の周りに火があって、それらより上方の物体も同様であるなら」（アリストテレス全集新 5, p.95）；トマス『アリストテレス「自然学」註解』第4巻第5章（第8講）第6節（L2, p.171a）「実際、宇宙の諸部分における位置の秩序は本性の秩序に即して認められる。というのは、最上のものである天体は最も高貴だからである。その後には、他の物体の間では、本性の高貴さに即して火があり、かくして続いて土にまで及ぶ」；『アリストテレス「天について」註解』第2巻第4章（第6講）第5節。

るものは物体と合一した非物体的実体〔人間の魂〕である。第三に、知性の固有性に基づけば、同じことが窺える。その理由は次の通り：明白なことに、知解とは物体を通じては行われえない作用であり、それは〔アリストテレスの〕『魂について』第三巻で証明されている通りである<sup>37</sup>。それゆえ、この作用が属するような実体は、物体に依存せず物体よりも上に高められた存在を持たなければならない。というのも、各々のものは存在するのと同じ仕方では作用するからである<sup>38</sup>。ゆえに、もし或る知解する実体が物体と合一するとすれば、こうしたことは、知解するものである限りではなくて別の或ることに即してその実体に生じるであろう。例えば、上述のように<sup>39</sup>人間の魂は、表象像から抽象することで知解する限り、知性作用を補完するために身体を通じて行使される作用を必要とする限りで身体と合一する必要がある<sup>40</sup>。こうしたことは実際のところ知性作用には附带的に生じていることであり知性作用の不完全性に属するのであるからして、その知性作用は可知的であるものに基づいてただ可能態においてのみ知を捉えているということになる。例えば、蝙蝠の視覚の不完全性には、暗闇で見る必然性があるということ

<sup>37</sup> Cf. アリストテレス『魂について』第3巻第4章429a24-27「それゆえ知性が身体と混合しているというのも不合理である。なぜなら、もしそうだとすれば、知性は、冷であれ熱であれ、ある特定の性質のものということになるだろうし、さらには、感覚能力をもつものについてはそうであるように、ある特定の器官が知性についても存在することになるからである。だが、実際にはそのような器官はまったく存在しない」(アリストテレス全集新7,p.146)；トマス『アリストテレス「魂について」註解』第3巻第1章(L.45.1,p.204, ll.194-221)「ゆえに、第一にアリストテレスは、前述のことに基づいて結論づけながら次のように述べている。もしわれわれの知性が、すべてを認識するためには「自分が」認識する物体的事物の本性によって限定された或る本性を持つてはならないならば、われわれの知性は「身体と」混交しないということ、すなわち、魂の感覚的部分が持つような或る身体器官を持たないということが同じように「合理的である」。その理由は次の通り：「もし或る」身体「器官が」〔魂の〕感覚的部分にはあるように知性にも「あるであろうとするならば」、知性は可感的事物の本性によって限定された或る本性を持つということが帰結するであろう。またこうしたことこそ、「或る質的なものが」、すなわち、例えば「熱かったり冷たかったり」するような或る可感の質を持つものがあることになるだろうということが帰結するとアリストテレスがまさに述べていることなのである。〔中略(引用者)〕それゆえ、〔魂の〕知性的部分には、感覚的〔部分〕にはあるような〔身体〕器官は「全くないのだ」とアリストテレスは続けている」。

<sup>38</sup> Cf. 本書第2項主文(L.24.2,p.24, ll.178-9)「かくして、各々のものは存在することに即して作用する」(石田2014b, p.141)；同(p.29, ll.300-3)「そして既述のように、各々のものは有である限りで作用するがゆえに、事物の存在は事物の作用に比例する」(p.145)；トマス『神学大全』第1部第75問題第3項主文(L.5,p.200)「けだし、如何なるものもその存在と、はたらきとを、同様の仕方において持つものだからである」(神学大全6,p.13)。

<sup>39</sup> Cf. 本書第3項第11異論解答(L.24.2,p.46, ll.526-30)「魂が完成されるために身体と合一するのは、表象にかかわる知解に関するだけでなく、〔人間という〕種の本性に関すること、および身体を通じて魂が行使する他の作用に関することでもある」(石田2015,p.87(ただし訳を改めた))。

<sup>40</sup> Cf. トマス『神学大全』第1部第51問題第1項主文(L.5, p.14)「いま、「知性認識する」ということは、以下において明らかになるだろうごとく、身体の、乃至は何らかの身体的なちからの活動たるのではないがゆえに、「一体的なる身体を持つ」ということは、決して知性的実体たるかぎりにおける知性的実体の特質に属することがらではなく、それは却って、何らかの知性的実体に、他の何らかのことがらのゆえに附帯してきたことがらでしかない。人間の魂の場合が、すなわち、これにあたるのであって、身体と一つたることがこの場合適切であるのは、人間の魂が不完全で、知性的実体という類に可能態において属するにすぎないごときものなのであり、それは後述のように、自らの本性において知の充実を有せず、ただ、可感的な諸事物から、身体的な感覚を通じて、はじめてこれを獲得するごときものなのだからである」(神学大全4, pp.151-2)。

が属す．ところで、或るものに附带的に結びつけられるものはあらゆる場合にその或るものとともに見出されるわけではない．また、或る類における不完全な存在の前にはその類において完全であるものが見出されなければならない．なぜなら、現実態が可能態に対してそうであるように、完全なものは不完全なものよりも本性的に先なるものだからである<sup>41</sup>．したがって、残るは、知性作用のために或る物体を要することのないような、物体と合一しない或る諸々の非物体的実体を措定しなければならないということしかない．[以上がその理由である．]

#### 【異論解答】

ゆえに、

一．第一に対しては次のように言われるべきである．このこと〔或る被造の霊的実体は物体と合一しないものであるか否か〕においてオリゲネスの權威が受容されるべきではない．なぜなら、当該の著作『諸原理について』でオリゲネスは古代の哲学者たちの見解に追従しながら誤った仕方でも多くのことを語っているからである<sup>42</sup>．

<sup>41</sup> Cf. トマス『対異教徒大全』第1巻第42章（L.13, p.118a, l.29）「というのは、完全なものは不完全なものよりも先にあるからである」（Andrea&北川2007, p.81）；第44章（p.130b, ll.13-14）「というのは、完全なものは、本性上、不完全なものよりも先にあり、それは現実態が可能態よりも先にあることと同じだからである」（Andrea&北川2008, pp.11-12）；第2巻第83章（p.521a, ll.6-8）「さて、実在の秩序においては完全なものの方が不完全なものよりも先である」（川添, p.311）；第91章（p.552b, ll.1-4）「もし或る類において或るものが不完全であるならば、そのものの前に、本性の秩序に即せば、その類における或る完全なものが見出される．というのも、完全なものは本性という点で不完全なものよりも先なるものだからである」；『神学大全』第1部第70問題第2項第5異論解答（L.5, p.178）「けだし、自然的な過程よりすれば不完全なものから完全なものに到達するのであるとはいえ、端的には、完全なものが不完全なものに先立つわけなのだからである」（神学大全5, p.99）；第77問題第4項主文（p.243）「或る一つの能力の他の能力に対する依存ということは二様の仕方ではえられることができるのであって、一つには、本性の秩序に即してである．すなわち、完全なものは不完全なものに本性的に先だつというのがそれである」（神学大全6, p.99）；第82問題第3項第2異論解答（p.299）「生成と時間においてより前なるものは、より不完全なものである．けだし同一のものについて見れば、可能態が時間的に現実態に先行し「不完全」が「完全」に先行するのだからである．然し、無条件的な、本性の秩序に即する仕方においてより前なるものは、より完全なものである．ここでは現実態が可能態に先だつのだからである」（p.220）；第85問題第3項第1異論解答（p.337）「現実態が、無条件的な意味で本性的に可能態よりもより前なるものであり、完成したものが未完成のものよりもより前なるものである」（p.305）；第2-2部第189問題第1項第5異論解答（L.10, p.538）「完全なものは、自然本性的には不完全なものに先行する．すなわちボエティウスの言うように、『自然は完全なものより起源を得る．』からである」（神学大全24, p.182）；第3部第1問題第5項第3異論解答（L.11, p.19）「完全なものは不完全なものよりも、両者が異なるものである場合には、時間的にも本性的にも先である」（神学大全25, p.49）．

<sup>42</sup> Cf. トマス『定期討論集 神の能力について』第6問題第6項第2異論解答（DP, p.176）「オリゲネスは複数の点でプラトン主義者の見解に追従している．それゆえ、被造の非物体的実体はすべて物体と合一するという見解にオリゲネスは与していたと思われる．無論のこと彼はこうしたことを明言はしておらず、他の見解にも言及しながら疑念の下に提出しているわけではあるのだが」；『神学大全』第1部第51問題第1項第1異論解答（L.5, p.14）「アウグスティヌスが『神国論』第七巻にいうごとく、「神は世界靈魂だ」とまで主張するひとびとがあるにいたっている．こうしたことは、然し、公教的信仰に、つまり、『詩篇』第八篇（第二節）の『汝の御稜威は諸天の上に掲げられた』という言葉のごとく、万物を超えて高きにある神を説く信仰に抵触するところから、オリゲネスはこれを神について語ることを拒否したのであって、ただ、その際、神以外の諸実体に関しては、他のひとびとの見解に従っている．その

二. 第二に対しては次のように言われるべきである。パスカリス [2 世] は、時間的なものが結びつけられているような霊的なものについて語っており、その時間的なものの売買によって霊的なもの自体も売買されるということが了解されている。というのも、霊的な権利 [ius] ないし諸々の聖別 [consecratio] はそれらと結びつけられる物的なものないし時間的なものからは別個のものとして自体的に自存しているのではないからである<sup>43</sup>。

三. 第三に対しては次のように言われるべきである。被造の霊はすべて、或るものは理性的魂のように自分のために、或るものは引き受けられた身体においてわれわれには見える天使のようにわれわれのために、物的扶助を要するのである<sup>44</sup>。

四. 第四に対しては次のように言われるべきである。被造の霊的実体は自分の存在に関しては永劫 [aevum] によって測られるのだと指定されている。無論のこと、アウグスティヌスの『「創世記」逐語註解』第 8 巻<sup>45</sup> [第 22 章] にある「神は時間に応じて霊的被造物を動かすのだ」<sup>46</sup> [という箇所] に即せば、被造の霊的実体の<sup>47</sup>運動は時間によ

---

点彼は、他の多くの点についてと同じく、往昔の哲学者たちの見解に従ったために誤謬に陥っているのである」(神学大全 4, pp.152-3)。

<sup>43</sup> Cf. グラティアヌス『教令集』第 2 部第 1 事例第 3 問題第 7 法文；トマス『神学大全』第 2-2 部第 100 問題第 1 項第 6 異論解答 (L.9, p.353)「靈魂がそれ自身によって生きるのに対して、身体は靈魂との合一によって生きるのである。そのようにまた、何らかのもの、たとえば秘跡とか他のそのようなものはそれ自身によって霊的なものであり、これにたいして何らかのものはそれらに固着することからして霊的なものといわれるのである。ここからして、『法令集』第二部において次のようにいわれている。「霊的なものは物的事物なしには前進しないのであり、それは靈魂もまた身体なしには身体的に生きることがないのと同じである」(神学大全 19, p.432)；第 4 項主文 (p.360)「或るものは二つの仕方では霊的なものに結びつくことが可能である。第一は、霊的なものに依存するものとしてであり、たとえば聖職者を得ることは霊的なものに結びつきがあるといわれる。なぜなら聖職者の職務を有する者のみがそれを得る資格があるからである。ここからして、このようなものは霊的なものなしにはけっして在りえないのであり、したがってそれらを買うことはけっして許されない。なぜなら、それらが売られることによって、霊的なものが売るという行為に従属させられることが理解されるからである。／(第二に) 他方、或るものは霊的なものに秩序づけられるかぎりにおいて、霊的なものに結びついているといわれる。たとえば、聖職者に聖職者授与することへと秩序づけられている聖職者授与権、および秘跡の執行に秩序づけられている聖なる器がそうである。したがって、こうしたものは霊的なものを前提としているのではなく、むしろ時間的順序においてそれらに先立つものである。それゆえに、或る仕方ではそれらを買うことは可能であるが、それらが霊的なものに結びついているかぎりにおいてはではない」(pp.446-7)。

<sup>44</sup> Cf. トマス『神学大全』第 1 部第 51 問題第 1 項第 1 異論解答 (L.5, p.14)「また、ベルナルドゥスの言葉は、こんなふうに解釈することができる。すなわち、被造の霊が必要とする物的身体的な用具というのは、自然本性的に自らと一つになっているところのそれではなく、以下に述べられるであろうとき、何らかの目的のためにとられるところのそれなのである、と」(神学大全 4, p.153)。

<sup>45</sup> G&S (p.191) に従って、「IV」を「VIII」と読み替える。

<sup>46</sup> Cf. アウグスティヌス『「創世記」逐語註解』第 8 巻第 22 章第 43 節 (PL 34, 389)「場所を介しては動かない霊的被造物は、場所を介して物体を動かすのであり、また時間を介しては動かない神は、霊的被造物を時間を介して動かす」(アウグスティヌス著作集 16, p.283)；トマス『神学大全』第 1 部第 10 問題第 5 項第 1 異論 (L.4, p.100)「アウグスティヌスは『創世記逐語註解』第八巻に、『神は霊的被造物を動かすのに時を以てする』と述べている。一方では、然し、悠久が霊的諸実体の尺度だとされているのである。それゆえ、時は悠久と異なったものではない」(神学大全 1, p.182)。

<sup>47</sup> レオ版 (p.63, l.276) では「eorum」となっている箇所を「earum」と読み替えることでこのように訳出した。

って測られる．ところで、被造の霊的実体が非存在へと転換されうると言われていることは、その霊的実体の中に存在する或る能力ではなくて能動者〔である神〕の能力に属す．というのも、被造の霊的実体は、存在する前には能動者〔である神〕の能力のみを通じて存在することができたのと同様に、存在している間には〔霊的実体を〕保存する権能を引き離すことができる神の能力のみを通じて存在しなくなることが可能だからである．それに対して、被造の霊的実体の内には非存在への能力は全くないのであるからして、被造の霊的実体は、動かされていなくても動かされることはありうるようなものが時間によって測られるのと同様に時間によって測られる．

五．第五に対しては次のように言われるべきである．内的で結合された動者によって場所に即して動かされることは感覺することと生きることを前提する．ところで、その場合に天使によって引き受けられた身体は動かされない．それゆえ、〔異論のような〕議論は成り立たない．

六．第六に対しては次のように言われるべきである．生きてかつ生命を与えることは結果という観点でたんに生きるだけよりも高貴なことである．しかるに、形相的に生命を与えるということは、身体なしに自体的に自存しながら生きる実体よりも高貴ではない実体にまさに属す．というのも、〔自分が〕身体の形相であるような知性実体の存在は、それが物体的本性に伝達されうるという点において、〔身体なしに自体的に自存しながら生きる実体よりも〕はるかに最下位にあつて物体的本性に隣接しているからである<sup>48</sup>．

七．第七に対しては次のように言われるべきである．天使は個別のものを、それによって神が普遍的なものも個々のものも認識するような、イデア的理拠の類似である普遍的形相を通じて認識する．しかしながら、天使の知性の形相を通じて再現される本性ないし形相をまだ分有していなかった未来の個別的なことを天使は認識しなくてもよい．他方で、神の知性についてはそうではない．神の知性は永遠の今に配されて全時間を一なる直観によって見渡すのである．

八．第八に対しては次のように言われるべきである．質料は他のものには本性的に受容されない限りで個体化の原理である<sup>49</sup>のに対して、或る基体に本性的に受容される形相は自分だけでは個体化されたものではありえない．なぜなら、自分の理拠に関する限り、一つのものに受容されるか複数のものに受容されるかはその形相にとっては違いが

<sup>48</sup> 同様の異論解答は次の箇所にもある：『定期討論集 神の能力について』第6問題第6項第8異論解答(DP, p.176)「身体と合一した魂はただ結果という観点だけではなくて形相的にも身体を生かしている．ところで、端的に言えば、たんに自体的に生きるだけよりも身体を生かすことの方が劣っている．というのは、魂は、〔自分と身体の〕両方からなる複合体において自分と身体に共通でありうるような最下位の存在を持つというような仕方では身体を生かすことができないからである．ところで、天使の存在は、〔魂よりも〕高きものであるのだから、そのような仕方では身体には伝達されえない．それゆえ、天使はたんに生きているだけで、形相的に〔身体を〕生かすことはない」；『神学大全』第1部第51問題第1項第3異論解答(L.5, p.15)「「能動者として生命を与える」ということは、端的に完全性に属することがらなのであり、だからしてそれは『サムエル記上』第二章（第六節）に『主は死と生命とを与え給う。』とあるごとく、やはり神に適合する．「形相として生命を与える」ということは、これに対して、何らかの本性の部分たるにすぎない実体、つまり、自らのうちに種の充的な本性を持たないような実体に属することがらなのである．だからこそ、「身体と一つならぬ知性的実体」のほうが、「身体と一つである知性的実体」よりも、より完全なるものなのである」（神学大全4, p.153）．

<sup>49</sup> 註12を見よ．

ないからである。しかるに、もし〔他の〕或るものに受容されえないような或る形相があるとすれば、その形相はまさにそのことに基づいて個性性〔individuatō〕を持つ。なぜなら、その形相は複数のものにおいて存在しえないのであって、自身のみが自分自身の内に留まっているからである。それゆえ、アリストテレスは『形而上学』第7巻〔第14章〕でプラトンに対抗して、もし事物の形相が抽象的であるとすれば、それは個別のものでなければならないと議論している<sup>50</sup>。

九、第九に対しては次のように言われるべきである。質料と形相による複合体においては、個体は種の本性に質料の指定と個的附帯性を付加する。しかるに、抽象的形相においては、個体は種の本性に事物に即した或るものを付加しない。なぜなら、そのような形相においては、自分の本質が自存する個体そのものだからであり、それは哲学者〔アリストテレス〕の『形而上学』第7巻〔第14～15章〕を通じて明らかな通りである<sup>51</sup>。しかしながら、〔抽象的な形相における個体は〕理拠に即した或るもの、すなわち複数のものには存在しえないということを〔種の本性に〕付加する。

<sup>50</sup> Cf. アリストテレス『形而上学』第7巻第14章 1039a25-33 「この同じ考察から、また、あのアイデアを説く人々に対してもいかなる結論が出てくるかは明白である。かれらは諸々のアイデアをそれぞれ実体であり離れて存するものであると説くとともに、同時にまた、それぞれのエイドスを類と種差とから成るものとしている。ところで、もし〔かれらの説くように〕諸々のエイドスが実在し、そして「動物」それ自体が人間のうちにも馬のうちにも存在するとすれば、これら両者のうちに存在するこの「動物」それ自体は、数においては一つであり同じであるか、あるいは異なるかである。ところで、その説明方式においては明らかにそれは一つである。なぜなら、その説明方式をあげる場合には、ひとは〔馬における「動物」にも人間における「動物」にも共通する〕同一の説明方式をあげるからである。そこで、もし〔かれらの説くように〕或る「人間それ自体」なるものがあって、これが或るこれと言われうところの或る離れて独立に存在するものであるとすれば、これを成す要素〔この類と種差〕すなわちたとえば「動物」と「二本足」もまたこれと言われう離れて独立の存在であり実体であらねばならなくなる。したがってまた、この「動物」についても〔さらにこの類と種差とに関しても〕同様のことが言われねばならなくなる」(アリストテレス全集旧 12, pp.256-7)；第15章 1040a8-9 「だがまた、実に、いかなるアイデアも定義されえない。なぜなら、アイデアも、かれらの主張するところでは、一種の個別的なものであり離れて存するものであるから」(p.260)；トマス『アリストテレス「形而上学」註解』第7巻第14講 (EM, pp.382-3, nn.1592-3) 「ゆえに、人間と馬において存在するものそのものがまさに数という点で同一であるのか、あるいはそれは人間と馬とは別のものであるかである。ところで、アリストテレスがこのような区分を導入しているのは、「プラトンが」、たしかに普遍的なものを共通に実体であると措定してはいたものの、種のアイデアを措定していた一方で、類のアイデアは措定しなかったからである。

〔中略(引用者)〕ゆえに、もし種が或る一つの理拠に即してすべての個体について述定されるがゆえに、自分に即して人間として存在するものそのものであるような或る人間があり、またそれが「この或るものである」ならば、すなわちプラトン主義者が措定するように、指定されうような自存するものであり可感的なものから分離された何らかのものであるならば、同等の理由で、種がそれから成立するようなもの、すなわち動物と二本足の類と種差が、同様にこの或るものを表示すること、および自分よりも下位のものから分離されうものであること、および自体的に存在する実体であることは必然である。かくして、動物は、人間と馬について述定されるような、数という点で一つの自体的に存在するものであるはずだということが帰結する」；第15講 (p.386, n.1612) 「したがって、もし個別のものが定義されえないならば、その場合にはアイデアも定義されることはありえない。その理由は次の通り：アイデアは、アイデアについて措定されることに即せば、個別のものでなければならない。というのも、アイデアは他のすべてから分離されて自体的に存在する何らかのものであるとプラトン主義者は措定しているからである。ところで、これは個別のものの理拠である〔以上がその理由である〕」。

<sup>51</sup> 註50を見よ。

十．第十に対しては次のように言われるべきである．物体から分離されたものである実体は形相だけのものではあるが，或る質料の現実態ではない．というのも，質料が形相を通じて存在を持つのであってその逆ではないがゆえに，質料は形相なしには存在できないが，形相は質料なしに存在できるからである．

十一．第十一に対しては次のように言われるべきである．靈的実体の間で最下位のものであるがゆえに，魂は，上位の実体よりも物体的本性に大きな親近性を持つのであるからして，物体的本性の形相になりうるのである．

（いしだ・りゅうた 筑波大学人文社会科学研究科 哲学・思想専攻／日本学術振興会  
特別研究員 DC）

※本稿は，JSPS 科研費 15J0085 の助成を受けたものである．